

V 学社連携・融合

公民館で、子どもたちの「自学・自習の力」を育む

—— 芦屋町土曜学び合いルームの取り組みを中心に ——

遠賀郡芦屋町教育委員会生涯学習課嘱託員
芦屋町中央公民館長 末吉 靖彦

1、地域の概要 (地勢、人口、教育機関、歴史・文化等)

総面積 11,42 平方キロメートル。白砂青松の自然環境豊かな町。北は響灘、東は北九州市若松区、南は遠賀町と水巻町、西は岡垣町に隣接する。人口 15,601 人、世帯数 6,710。町の中央を一級河川遠賀川が流れ、響灘に注ぐ最河口に位置する町である。

教育施設では、6 保育所(園)、3 小学校、1 中学校がある。小・中学生数、1,521 名。

町内に航空自衛隊芦屋基地、芦屋競艇場があり近郊型野菜生産地である。

歴史・文化遺産は特筆するものが多く、県指定文化財が 13 件。特に平成 19 年度に「芦屋の八朔行事」が文化庁の記録作成の措置を講ずべき無形の民俗文化財（福岡県では 16 年ぶり）に採択された。中世室町時代から作られた茶の湯釜の名器「芦屋釜」の生産地であり、現在芦屋釜の里工房で鋳物師がその復元・復興に取り組み、ほぼ完成品が作れる段階にまで至っている。



2、事業の内容 (目的・趣旨、実施内容、予算等)

(1) 芦屋町土曜学び合いルーム

本事業は、平成 14 年度の学校週 5 日制実施に伴い、当時の社会教育課主管事業「土曜日学校外教育の受け皿」として発足。基礎学力の向上、学習習慣の定着・自学自習の確立を目指し、折からの学力低下問題も憂慮して創設された。

毎年度、5 月の中旬から翌年 3 月上旬まで開設。各小学校区にある山鹿公民館、芦屋東公民館、芦屋中央公民館を会場にして実施している。

土曜日午前 9 時から 11 時までの 2 時間、年間 30 回前後実施し、今年 9 年目を迎える。

平成 20 年度からは、学習に加えて月 1 回の運動・スポーツ（サタデースポーツ）の日を新設した。サタデースポーツは各小学校体育館を会場に行なっている。

予算は、大学生等の支援ボランティア交通費として事業費 550,000 円を計上している。これまでは平均 300,000 円前後の執行である。

平成 22 年 12 月末での参加者数は、学習とサタデースポーツ参加者を併せて 1,462 名。毎年平均延べ 2,000～2,500 名が参加している。因みに、昨年度は参加総数 2,425 名、学習等支援ボランティア延べ数は 221 名。町内教員参加延べ数は 251 名であった。



(2) 子どもと大人の科学フェスタ 2010

本事業は、主として子どもの科学に対する興味・関心を高めるために、楽しい理科工作や、専門的な観察・実験を体験せざることを目的として実施しているものである。

また、引率する親子のふれあい体験の場として、大人の科学体験もできる。

過去においては、福岡県青少年科学館の巡回展にあわせて共催したこともあったが、近年は下記の関係団体の協力で実施している。毎年1回の開催で、今年度6回目である。

平成22年度の科学フェスタは、期日：6月19日（土） 10時～14時の4時間。
会場：芦屋町総合体育館メインアリーナ（駐車場やブースの関係で3年前から場所を変更）
学社連携・融合事業として協力団体は7団体の協力、支援で実施した。

内訳としては、①北九州児童科学館（サイエンスレンジャー）、②福岡教育大学理科教育（物理・化学・地学・生物）の4学部、③電源開発KK若松総合事業所（Jパワー）、④芦屋釜の里工房（鋳物師）及び学芸員、⑤遠賀郡小学校理科部会、⑥芦屋中学校理科部、⑦芦屋町内3小学校理科関係者の支援で、観察・実験及び理科工作など、合計14ブースを設定した。大学、地場企業、芦屋釜の里など、町内の学校では不可能な学社連携・融合事業として年々充実してきている。

マンパワー関係では、各ブースを担当する福岡教育大学理科教育学部教授・大学(院)生、Jパワー等の外部講師や助手31名、遠賀郡小学校理科部会教員19名、各ブースの安全や進行担当責任者として町内の学校管理職等12名、教育委員会スタッフでは、教育長を代表責任者として14名、総勢76名の協力者の事業であった。中央公民館長は、コーディネーターとして、外部団体との連絡調整、会場図設計、情報ビラ作成等の任務に当たっている。

当日の入場者数は、園児から中学生まで約300名、大人が60名程であった。

予算は60,000円。主として、各ブースの実験・工作等材料費と協力者・スタッフの昼食弁当代に充てている。大学関係では、若干の謝礼（交通費）を支払っているが、原則全てボランティアでの協力である。



3、事業の成果と課題

(1) 芦屋町土曜学び合いルームについて

① 成果と思われる面

平成14年度開設当初は会場を中央公民館のみで実施していた。従って、山鹿小・芦屋東小の児童の参加は少なく、年間延べ数は1,000名程度であった。

平成18年度から、近くて参加しやすい3公民館で実施するようになり飛躍的に参加児童・生徒が増加、毎年2,000～2,500名程度の参加数を継続している。

近年子どもの体力低下も問題になる状況で、平成21年度からは、学び合いルームの学習に加えて、月1回のサタデースポーツの日を設けるなど、課題に対応して内容や方法を改善している。サタスポは町体育指導員が中心であるが、学生ボランティアも協力する。

芦屋町土曜学び合いルームは学生ボランティアや町内の管理職をはじめとする教員の支援

が基盤である。登録率は町内3小学校全児童の3割強である。中学校は部活動のため、参加生徒は少なくなっている。昨年度、初めて出席皆勤の児童が3名あった。

本事業が自学・自習を目的にして、子どもの自主性や自発性を育むという観点から、学ぶ意欲や学力向上に一定の学校外社会教育支援事業として成果があると考えている。

あわせて、携帯を持たない勇氣・持たせない愛——芦屋町「こども・脱ケータイ宣言」——の取り組みと連動して、少なくともこの学びあいルームに参加している子どもは、土曜日、学習かスポーツに取り組んでいてノーメディアを実践している子ども達である。

② 課題の面

学習支援ボランティアの確保が課題である。中核は近隣の大学（福岡教育大学・九州共立大学・女子大学・東筑紫学園等）との連携で学生ボランティアの募集を行なっている。

大学教授や学生生活課学生支援係担当者とのパイプづくりが必要である。

18年度以降、会場を3会場に広げたため、特に学生を配分することが困難になっている。しかし、4年間継続して学習支援をしてくれる学生もいて子どもとの信頼関係もできている。

(2) 子どもと大人の科学フェスタ 2010について

① 成果と思われる面

第一に、学社連携・融合事業として充実してきたことは、大学・企業・北九州児童科学館等の専門分野との協力体制ができたことである。

スタート時点では、遠賀郡小学校理科部会と町内の小中学校理科関係者で限られたブースを開設していたが、数年前から専門分野のブースを加えて提供できるようになっている。

特に、福岡教育大学の協力は4分野の専門的な展示や面白実験など、子どもだけでなく大人も楽しめる内容である。（魅惑の鉋物観察、紫外線の生物影響、液体窒素の不思議など）

児童科学館・サイエンスレンジャーの興味を引く理科工作、Jパワーの発電実験、節電など環境教育も視点を入れたブースづくり、芦屋町だからできる鋳物製作体験には子どもが列を作って待ち、製作に打ち込んでいる。年々、希望者が増加している。

情報活動の努力や会場から遠い方々のために、町シャトルバスの運行など参加しやすい対策も講じていることが入場者の増加に寄与しているのかも知れない。

② 課題の面

協力団体が広がった分、事前の連絡やブースの調整を十分に行なわなければならない。調整が十分に行なわなければならない。

各ブース開設に当たって、観察・実験等に必要な経費は教育委員会が支払っているが予算が少なく材料費を抑制してブースをお願いしなければならない。

小学校理科部会教員の協力をメインにしているため、開催時期を1学期、6月にしているが梅雨期と重なること。できれば、芦屋町教育推進月間中の事業に位置付けたいのであるが学校現場の多忙さを考慮すると1学期実施はやむを得ないところである。